Policy Topics

「ことばの市民」になる教育へ
- 自己・他者そして社会の外国語学習[1]

Towards the Education for the Citizen by Language

細川 英雄[2]
Hideo Hosokawa

近年のグローバル化にともない、これからは外国語が話せることが必要かというような質問をいろいろなところで受けることがあります。一般には、グローバル化＝英語ができることという発想があるように思います。

今回は、「ことばの市民」になる教育へというテーマで、「グローバル化とは何か」を考えつつ、本来の人間の教育の観点に立ち戻って、自己と他者そして社会に関連する外国語学習のあり方について考えてみたいと思います。

ことばの教育とその種類

はじめに、ことばの教育の種類について少し考えてみましょう。

まず、母語教育というものがあります。母語というのは、生まれながらのことばということができるでしょう。人は、自分の生まれる場所や社会を具体的に選ぶことができませんから、その生まれ落ちた場所で自分を生み育ててくれた両親のことばを学ぶことになります。これが母語です。学校教育では、国語教育または国語科教育として学ぶものですね。

次に、第二言語教育というものがあります。やや難しく言うと、当該の言語社会にあって、その言語を学ぶ場合です。たとえば、日本語を学ぶために日本に留学する人たち、つまり留学生の学ぶことばがこれにあたります。

第3番目が、外国語教育です。これは、非当該言語社会にあって、その言語を学ぶということです。たとえば、日本で英語を学ぶ事例はこれにあたりますね。皆さんの多くは、英語を外国語として学んでいるわけです。

何のために言語を学ぶのか

では、次に、それぞれの言語教育において、何のために言語を学ぶのかということについて考える必要があります。

母語教育は、社会の構成員となることをめざします。とくに国民国家的社会では、その国の国民として読み書きが重要であるという発想が基本となります。国家の命令・伝達を周知するためには、文字を獲得させることが必要になるからです。

第二言語教育では、①言語習得　②専門的知識　③その社会で仕事という順番が考えられます。ことばを覚え、そのことによって専門的分野の知識を得て、その言語社会で仕事に就くという手順が考えられるでしょう。

最後の外国語教育では、言語習得が当面の目的となります。その中身は、知識とコミュニケーション能力です。学習言語に関する知識を得て、コミュニケーション能力を育成するというのが、外国語教育の目的と考えられています。

1　本稿は、2015年12月10日（木）の本学三田キャンパスでの講演をもとにしたものです。

2　早稲田大学名誉教授、言語文化教育研究所八ヶ岳アカデメイア

「言語を習得する」とはどういうことか

そこで、「言語を習得する」とはどういうことなのでしょうか。

まず、「言語に関する知識を得る」ことが必要になります。皆さんが学校で学んできた言語学習のほとんどはこのタイプです。しかし、言語に関する知識を得るだけでは、言語が使えるようにはなりません。つまり、その言語を身につけることが必要になります。こういうときに、やはり話題になるのは、「外国語を一番効率的に学べる方法って何だ」ということです。

この言語を身につける最良の方法が存在するという幻想は、一般の人だけでなく、教育の世界でもかなり幅を利かせています。たとえば、「英語ができる」という時の「できる」というのは、何をもって「できる」というのでしょうか。TOEICで何点取るということが目的なのか、それとも実際にそのことばを使ってある程度中身のある話ができるようになることが目的なのか、あるいは中身はなくてもいいから、その場でペラペラ話せればいいのか、それは人によってだいぶ違うでしょう。言語を身につける最良の方法、つまり万人に共通する魔法の杖が存在するというイメージが、いかにつくられたものであるかということがわかると思います。

その言語社会に浸りこむ

それでも、とにかくそのことばを使いたい、その社会で使えるようになりたいのだったら、その社会に行ってその言語に浸りこむ(イマージョン)しかないのです。

浸り込むと言っても、ただ生活するだけでは駄目でしょう。もう本当に浸り込まないといけません。たとえば、外国人の相撲の力士は、とても上手な日本語を話しますね。彼らは学校で日本語を学んだわけではありません。毎日朝から晩までその部屋で親方や女将さんにビシバシ言われながら稽古をして生活しています。日本語で暮らさなければならない場がつくられているからです。この場合の、日本語で暮らさなければならない場とは、日本語で人の言うことを理解し、自分の考えていることを表現して、その社会で十全に生きていくという場のことです。

このように、その言語を使えるようになるという意味だったら、1、2年そのことばを使う社会に浸り込んで暮らせばいいわけです。しかもそれは若ければ若い程良い。なぜなら母語の干渉が少ないからです。学校に行く必要はほとんどありません。

教育の場の役割

では、学校は何のためにあるのでしょうか。

学校で勉強するのは、単に練習をしたりするのではなくて、自分が何を考えているのか、何を言いたいのか。目の前の他者にそれをどうやって伝えるのかということです。他者と意見のやりとりをする、つまり対話をするためには、一つのテーマが必要です。ただ、おしゃべりをすればいいというわけではないでしょう。私は、おしゃべりと対話を分けて考えています。この対話のテーマというのは、思考の軸とでもいうべきものです。それが展開できるような場こそが本来の教育の場あるいは学校と言い換えてもいいでしょう。学校は社会の準備にあるわけでもなく、受験のためにあるわけでもなく、その人が人間として、個人として、他者と交わり、社会を考えていくための場でなければならないのです。学校そ

のものが社会なのです。外国語という言語学習も本来、そうあるべきではないでしょうか。なぜなら、「コミュニケーション能力をつけてどうするの？」という問いは、外国語教育にはありませんでした。コミュニケーション能力やそのスキルだけが先行して目的化してしまい、何のために外国語を学ぶのかということが見えにくくなっています。コミュニケーション能力をつけるだけだったら、先ほど述べたように、その言語を使う社会に浸り込むだけで十分です。

だから、学校で重要なことは、コミュニケーション能力のもう少し向こうを見る必要があるのです。それは、自分が今まで育って使ってきた母語とは違う構造の言語で、あるいは違う認識の仕方で、その言語を使うことによって、言わば自分を相対化することができるということです。相対化という作業は、実際は母語でもやっているのですが、なかなか意識的になりにくいものです。それをあえて外国語で行うというところに意識化、自覚化の意味があると私は思っています。そうした意識化の成果として、自分の中にある経験をどのようにして第三者に伝えていくかということ、この経験がまた必要になります。こうしたことを考えることが学校、つまり教育の場の役割です。

ことばの市民の教育へ

以上のような考え方に立って、もう一度冒頭に出したグローバル化について考えてみましょう。グローバルとは地球のことですから、地球に生きる人間としてどのような地球であって欲しいか、その地球という社会にあって、個人として何ができるのかと考えることになります。そういう意味では、この地球での人の生きざまというものは、70 億のジグソーパズルのようなものなのではないでしょうか。そのなかで個人は、それぞれのピースという役割を果たしている。だとすれば、個人の存在のオリジナリティを自覚できるような環境というものをどうやってつくっていくか。これは人間としての権利でもあると同時に義務でもあるでしょう。

ことばによって自律的に考え、他者との対話を通して、社会を形成していく個人、これが「ことばの市民」になるということなのです。なぜなら、ことばの学びというのは、おそらく言語を習得するということではなく、むしろことばによって活動することでアイデンティティを自ら形成していくことだからです。しかも、私たちは、アイデンティティの複合的な危機というものをさまざまに抱えています。それを克服するためには自己発信と共に他者を認めること、それから社会へ参加していく、こういうことから自分をつくっていくことになります。自分から発信し、他者を理解しつつ、この地球でさまざまな人たちと生きていくための社会について考えていく、そういう活動の場をつくっていく必要があるからなのです。このような学びの方向性を持つこと、みなさん一人一人に、ことばの市民をめざしていただきたいと願う次第です。

【付記】

本稿は、2015年12月10日（木）関西学院大学総合政策学部で行われた講演「「ことばの市民」の教育へ」にもとづき、その一部を活字化したものです。招聘等、さまざまな労を煩わせた牲川波都季さんに謝意を表します。